からしだね

2018年6月号
(539号)

キリストの受難 カトリック池田教会
主任：ノノイ・プラザ神父
住所： 〒563-0041　池田市満寿美町9－26
TEL ： 072-751-2400　FAX：072-753-4624
URL(ホームページ)：http://www.ne.jp/asahi/catholic/ikeda/church/

本号の記事の主題など

ノノイ･プラザ神父による巻頭言
「コルプス･クリスチ ― キリストの御体」
國井健宏神父様が「信仰入門」を開設
大人の日曜学校だより
みんなの談話室
辻邦生『西行花伝』(1995) 再読
畠神父様の「霊性の勧め」
6月のカレンダーへの追加

巻頭言

コルプス･クリスチ　― キリストの御体

ノノイ･プラザ C.P.

今年の「キリストのいともおごそかなる御体と御血」は６月最初の日曜日である３日となっています。いま言った祭礼の英語名（"The Solemnity of the Most Holy Body and Blood of Christ"）たるや、重々しくて威厳にみちた高尚な感じがしますね。いっぽう日本語訳は「キリストの聖体」だけですから押さえてありそうです。ただし「祭日」と示されてはいますが。

ところで、今年この日に読まれる御言葉は、神と人間との一致を育むにさいして生ける血がどんな役割を象徴的に果たすかについて力強い聖書的イメージをもちいています。たとえば第一朗読は『出エジプト記　２４章３～８節』からとってあり、血をまくことでいかにモーゼが神と人びととの契約をシナイ山で厳粛に裁可したかを語ります。そのあとに出てくるヘブライ人への手紙では、キリストの御血にこめられた浄化力をとおして、神は民との新たな永久（とわ）の契約を結ばれたのです。福音書もまた、イエスがパンとブドウ酒を御自身の聖なる体と血に換えられた最初の聖餐の様子を、わたしたちに語ってくれます。

初期教会のもっとも偉大な説教者として知られ、その名前たるやギリシャ語で彼にふさわしく「黄金の口をもった」という意味になる聖ヨハネ･クリゾストモス（コンスタンティノープル大司教　347頃生～407頃没）がカテキズム問答のひとつで、キリストの御血がもつ力についてこんなことを言ってますよ。

「キリストの御血がもつ力を理解したいなら、古代（旧約聖書）の説明にでてくるエジプトでの（イエスの）予示に立ち返るべきだろう。穢（けが）れなき子羊を屠（ほふ）って、その血を家の門に振りまけ、とモーゼは命じる。どういうつもりなのか、なにも判らないケダモノの血がどうして理性を与えられた人間を救えるのか、とモーゼに尋ねたとすると、血それ自体に救いの力があるというのではなくて、子羊の血が主の血を兆しするのだという事実にこそ救いの力がある、とモーゼは答えよう。モーゼの時代、門口に血が塗りつけられているのを知ると、破壊の天使はその家に入っていこうとはしなかったわけで、門口に塗られた象徴にすぎない血ではなく、信仰をもつもののロに本物の血を見つけた悪魔だって、よけいに（信者という）キリストの聖堂には入らない･･･

福音書の記録によれば、死んだイエスが十字架にまだ付けられていたとき、ひとりの兵士がやって来て脇腹を槍で突くと水と血がすぐに流れ出た、とある。水は洗礼の、血は聖餐のシンボルである。この兵士が主の脇腹をついて聖堂の壁をぶち抜いてくれたので、わたし自身はそこに宝物を発見してわが物とできた。

これでキリストがどんなふうに新婦をめとり、どんな食べ物をわたしたちに与えてくださるか、おわかりだろう。ただひとつの同じ食べ物によって、わたしたちは存在し養われてもいる。女性が自分の血とお乳を使って子供を養うように、キリストは自分が命をお与えになった人たちを自らの血で絶え間なくて養われる。」

太古以来、聖餐はつねに私たちの礼拝の中心でした。だからこそ聖餐のない教会を考えることなどできないと言えるのです。聖餐こそは神とわれわれ、またわれわれ互いの一致をしめすおおいなるシンボルです。ともに集って聖餐を祝うたびに、わたしたちはひとつに―イエスにおける兄弟姉妹なるのです。まさしく主の体と血の聖餐は、わたしたちの魂を養う糧になったのです。だからこそ、そうした驚くべき贈り物について神にいつも感謝するべきです。願わくば、この贈り物にもっともっと深い感謝の念をもつようになりますよう。

國井健宏神父様が「信仰入門」を開設

宝塚市売布の宝塚修道院に移られた國井健宏神父は池田教会で求道者向けに「信仰入門」の名で２３年振りに講座を始められました。カール記念館の2階会議室で、毎週日曜日の13時から14時３０分まで開きます。

５月13日の第３回現在での受講者10名中の求道者は５名であって、初回の講座では、太平洋戦争で敗れて大人たちが失意し、その日暮らしを送っていたのに、米子東高校の生徒であった國井青年はESSサークルで英会話の実習相手の神父のたどたどしい日本語で語られたお話「日本の土になるために来た」に衝撃を受け、19歳で受洗したことが語られました。講話後の３０分では、受講者各人が「神の存在を感じた状況や出来事」を話すように促されました。

第2回では、神がユダヤの民の長く、苛酷な歴史を通して人をどのように導き、救ったかをモーゼ五書と預言書、知恵書などから探れることが語られました。

第3回では、創世記の第２章を読んだ後に、楽園における神と人と蛇の間の寓話的な会話を通して人間の罪の原形が顕かにされました。

５月の後半では、神がこの世界といのちをどのように創られたかを創世記（第1章）の物語から読み解く予定とのことです。
尚、毎日曜日の全てに出席できなかった方のために、講話だけを録音したCDで補習できるようにしています。

６月のガラスケースのことば

あなた方は地の塩である

マタイ5・13

みんなの談話室

辻邦生『西行花伝』(1995) 再読

直

願わくは　花のしたにて　春死なん
そのきさらぎの 望月(もちづき)の頃

西行

死は怖い。逃れられない。苦しいだろう。人を圧倒する永遠の敵である。そんな敵とどう向きあえばいいだろう。ひとつの思いがこのうたには示されているようである。美しく咲き誇った桜のもとで死を迎えられるのなら、その癒やしが恐怖をやわらげよう。ひょっとすると敵が「友」ともなりうる。桜を眺めながら迎える死は甘美でさえあるかもしれない。桜を愛し、桜に親しむ日本人の感性をみごとにとらえた言葉は、美しく咲く桜をバネにして恐るべき敵と渡りあう心構えを語りかける。だからこそ、このうたは九百年の時空を越えてわれわれに訴えかけるのだろう。九百年まえの言葉が命を失わず生きつづける。

今年は西行生誕九百周年にあたるとか。このうたのように死にたい、桜のもとで死と戯れたいと願う日本人は少なくないわけだが、平安時代に生きたこの歌人が二一世紀の日本人に感銘を与えることの意味は興味ぶかい。二千年前にエルサレムで惨めな死をむかえた男の教えを守ろうとわれわれに感じさせるのとおなじ力が脈打っているから。

若き平清盛は「この世を変えるのは権力(ちから)しかない」と出家まえの西行(佐藤義清[のりきよ])に言う。ピラトと同じで人を動かすのは力だと清盛入道は信じて疑わない。いっぽう「歌ほど尊い」ものはないと信ずる義清は「人の心を変え、ひいてはこの世を変えることができる」のは、うたのほうだと応ずる。「たしかに剣の力は人を殺すことができる。だが、人の心は殺せない。同じように権力は世を変えることができる。だが、世の心を変えることはできない」と信じるのである。歴史は義清に軍配をあげ、平氏の栄華は一夜の夢と終わった。

死にうち勝ったイエスがわたしたちを捉えて放さないのとは対照的に、地上の繁栄で二千年の時間を克服できたものはない。地上のものはすべて滅んだ。

二〇年ぶりに『西行花伝』を読んだ。「美と現実の相克」(著者付録)を核に据えて書いたと辻邦生は語る。これは「うたと政治権力」、われわれの信仰同様「目には見えない思想と形ある地上の価値」に置き換えられる。若いときには深くは考えられなかった死と桜について思いめぐらせた結果が、うえのようなわたしの感想とあいなった。桜はもう散った。だが来春にはまた美しく咲くだろう。御復活である。『西行花伝』、お読みあれ。

畠神父様の「霊性の勧め」

T.O.

初めて池田教会に来たのは、もう２０年以上前のことですが、家内の遺言が池田教会で神に赦されて、聖堂横の納骨堂に遺骨を納めてもらうのを望んだからでした。しかし、わたしにとっては、蛸壺のような狭い世界を主日のミサの福音朗読や感謝の祭儀が象徴するイエス･キリストの世界に繋ぐのは容易ではなく、教会はとても不思議なところでした。思い切って三歩踏み出して、カール記念館2階にある主任司祭室で畠神父様から入門講座を受け、その翌年の4月に受洗するまでに10年近くの年月が経過していました。

その時以降の１０年余では、池田教会の信徒の皆さんや御受難修道会の司祭の方々が語る世界が単純な解を寄せ付けない広さと深さを持つのに気づき始め、多様な人が存在する教会に戸惑いを感じるほどでした。しかし、受洗後の11年余の間に畠神父様は「からしだね」に書かれた42篇の巻頭言の中で福者高山右近や司牧チームを組んだ故松本神父様･故デニス神父様の霊性を誇らしげに語られて、わたしたちに霊性(イエス･キリストへの信仰を実践するあり方)を育てるいくつかの手掛かりを示してくださいました。また、個人の霊性だけではなく小教区共同体の霊性を育てることも進めています。それらの7つの巻頭言のタイトルと「からしだね」のナンバーを挙げて、感謝の意をサバティカル研修に出られた畠神父様に表わしたいと思います。

1. 回勅「希望による救い」読書の薦め(428号、2008年)

キリスト信仰の対神徳である信仰、希望、愛を受洗前の「入門講座」で畠神父様から初めて

聞いた時、若年時に抱いていた「希望」の殆どを失っていたことに気付きました。その「希望」について、畠神父様はベネデクト16世の言葉、「完全で決定的な希望を保証するのは神なのです」、「イエスキリストとの交わりは、わたしたちを『すべての人のための存在』であるかたへと引き寄せます。そしてこれがわたしたちのあり方（霊性）となります（回勅p.57）」を引用して、回勅「希望による救い」を読むことを勧めています。

2.「朝の祈りを共に」（443号、2009年）

ご自分の経験を踏まえて「朝の祈り」は祈りのリーダー（信徒使徒職）ばかりでなく、個々の信徒の霊性を高めるに役立つと実施された。

3.「･･･この子は自分の民を罪から救うからである（マタイ1･21）」（479号、2013年）

再び、ベネデクト16世教皇のことば「希望は、本質的に神を知ることに基づいて、愛から生まれる」を引用して、「近代以降にはイエスのメッセージが個人主義的に解釈されるようになり、この世の希望は科学技術製品の実現化への期待に置き換えられている」と畠神父様は記しています。

4.「子供の心に導かれて信仰の山、エベレストの頂上を目指そう」（484号、2013年）

畠神父様の2つの指摘が印象的です。「わたしたちの信仰の頂点は、人間的な理解を超えた先にあります」、「聖霊体験とは、『神の愛がわたしたちの心に注がれた（ロマ5･5）』ことの体験であり、･･･聖霊に導かれて生きる新しい人となることです」

5.「ユスト高山右近の列福に際して思うこと」（524号、2017年）

フランシスコ教皇は回勅「ラウダート･シ」を著わして、人と創造主である神とのかかわり、被創造物である自然とのかかわり　と　他の人とのかかわり、の全てが相互的･相補的でないから、わたしたちの住処である地球の持続可能性は危ぶまれると憂慮しています。人と自然との一方的なかかわりは人の精神と人の肉体との一方的なかかわりの反映であり、人は自己の内部を見ることが難しく、自己の内部を統合しきれず、人は神、自然、他者、と自己との四つのかかわりに正面から向き直って、回心されるように教皇様は呼びかけています。その回心にはキリスト教の教義と個人や共同体の行動を、刺激し、動機づけ、励まし、意味づける、内的原動力が導く霊性が欠かせません。戦国時代に生きた高山右近が霊性を育んだのもその内的原動力であると畠神父様は記されています。

6.「天から恵みの雨が降るとき」（530号、2017年）

7.「物語は心を開く窓です」（535号、2018年）

司牧チームの同僚であった故松本一宏神父様（6）と故デニス･マクゴワン神父様（7）の霊性を偲ばれた畠神父様の二つの巻頭言は非常に稀有な読み物であると思います。

大人の日曜学校だより

4月 福音の分かち合い

「わたしは良い羊飼いである」ヨハネ10．11～18

この週のヨハネによる福音書ですが、今回の箇所についても、「難しい」という意見が出ました。イエス様の厳しさに接するとき、私たちはそれをどう受けとめれば良いか、とまどうことがあるのです。

例えば、“私は命をふたたび受けるために、捨てる。（中略）私は命を捨てることもでき、それをふたたび受けることもできる。これは、私が父から受けた掟（おきて）である。”

この言葉もある意味、重く厳しいものがありますが、ただ、イエス様はここで暗にご自分が神の子であると主張しようとしたのではなく、むしろ初めから（この宇宙が存在する前から）イエスは神の子であり、そしてそのことを弟子たちに向けて言葉にして語られた、そう捉えることのほうが私たちにとっては自然でしょう。

今月は7名。大人の日曜学校は特別なことは何もしませんが、毎月の集いの中で良いと感じる点は、決して硬くならずに、たわいのない話の中で何度となく打ち解けて、ぱっと笑い合う瞬間が起きます。とかく、教会の中では気が張ってしまうことが多い中、そういう意味では心のストレッチ体操です。

また、誰からともなく、イエスについて考え、みことばについて考え、神について考え語り始める時間があることも大切です。それは決して義務感にかられてそうするのではなく、むしろ、そのような思いが自然に言葉となって話すことで、やがて一同の気持ちがひとつになることがあります。小さな集まりだからこそ出来ることとも言えますが、それらのことは私たちには尊いことと考えています。

研修委員会

表紙の写真について

カトリック鶴岡教会の天主堂。山形県鶴岡市にある。

フランス人パピノ神父の設計により、当地の大工が施工して、明治36年（1903年）に完成し献堂された、木造瓦葺きの天主堂である。国の重要文化財に指定されている。

もう十年以上も前、まだ受洗のお恵みを頂いていない頃、鶴岡市へ行った。庄内藩の藩校などの名所を連れと見学したりしながら、ぶらぶら歩いていたら、かわいい真っ赤な尖塔が空へ突き出ているのを目にした。てっぺんには十字架がある。教会には興味のない連れを残し、そちらへ向かった。カトリック鶴岡教会の天主堂。真っ白に塗られた羽目板壁のちんまりとした建物だった。横にある保育園のほうへ会釈をして、教会の階段を上がった。まず履物を脱ぐ。中は静まり返っている。ヨーロッパの教会のような造り（二つの側廊を持つロマネスク様式だそうである）だが、白塗りの木製の柱や壁がやさしい感じだ。なによりも畳敷きなのが、ほっこりとする。端っこのパイプ椅子に座って、しばらく心を静めたのち、ふと横の窓々に目をやると、窓は繊細な聖画で埋め尽くされていた。それはステンドグラスではなかった。ペンや絵の具で描いたような絵。セロファンに絵を描いて透明なガラスに張り付けたかのように見えた。美しかった。

あとから聞いた話では、ここには日本としては珍しい黒いマリア様がいらっしゃるという。予備知識なしに訪れた私は、残念なことに、黒いマリア様に気づかなかった。もしかしたら、黒いマリア様が、今度は会いにいらっしゃい、と遠い鶴岡までそのうち招いてくださるかもしれない。

Y.N.

6月の教会カレンダーへの追加

6月7日、14日、21日、28日（木）
10時30分～　聖書100週間
6月8日、22日（金）　14時~16時
福音書を学ぶ会
6月3日、10日、17日、24日（日）
13時~14時30分　信仰入門

宝塚黙想の家から 黙想会のお知らせ

■日帰り黙想会
6月28日（木）10:00～15:30
指導：山内十東神父
6月29日（金）10:00～15:30
指導：山内十東神父

■週末黙想会
6月23日（土）17:00～6月24日（日）15:30
指導：山内十東神父

■韓国語による聖書の勉強
6月27日（水）10:00～15:00
指導：アンドリュー神父

各黙想会、費用等のお問い合わせは「宝塚黙想の家」まで。☎ 0797（84）3111

お知らせ

カール記念館の外部使用者懇親会
6月10日　13:00～
福音宣教委員会

編　集　後　記

街なかの空に燕が飛び交い、初夏の訪れに気付かされます。教えるともなく毎年、南国から日本へやってきて、せっせと子育てを行う小さな鳥に私はいつも感心させられます。

私の大好きな童話「幸福な王子」にも、献身的な燕が登場します。寒さに弱い燕は命と引き換えに、貧しい人や恵まれない人へ王子の像の宝石や金箔を、冬になり寒くなっても届けます。亡くなった燕と悲しみで張り裂けてしまった王子の心臓を「もっとも尊いもの」として天使に取りに遣わせた神様。この物語を読む度に、悲しいのですが、「あぁ、良かったなぁ」と安心します。決して神様は打ちひしがれた私たちを見捨てたりはしないのだな、と思うからです。6月は「イエスのみ心の月」。イエスのみ心の限りない愛を感じ、こたえていくことが出来るように過ごしていきたいです。

Ana